

て来ました。

我が家は、父は日露戦争に出兵、ラッパ卒で上等兵で帰るといふ軍人一家でした。長兄は今申したとおりシベリヤ抑留者ですが、日ソ開戦時、対ソ戦で左の肩から右の背にかけて銃弾が貫通し、今でも弾の出口の傷は大きく残っているのですが、その負傷のままシベリヤで強制労働させられました。無事帰還したのです。

親子四人外地で戦い、幸いにして皆生還することができたのですが、若い時から父から鍛錬されて育った我々は気力、体力と運のお陰です。そのため全員復員し、現在は、それぞれ家業に精励していますが、二度としてはならぬ戦争であり、あの光景は死ぬまで忘れることはありません。

## 海軍生活の思い出

愛媛県

石川 幸一

私は昭和十八年八月七日佐世保第二海兵団へ、現役兵として入隊しました（甲種合格）。

私の入隊当時の家族の状況は、

父 健在 農業 七十三歳

母 〃 〃 六十八歳

姉四人 〃 全員結婚して他家へ

本人 〃 製紙会社勤務

その他兄弟妹なし

ということ、両親は高齢のため私が入隊しての不在中は、長姉の夫（住友の会社へ勤務して毎日汽車で通勤中）が約三年間、私の代行として農業のみならず家事一切を切り回してくれました。有り難いことと、銃後の守りを完全にしてくれた義兄への感謝でいっぱいです。

さて、出発のときは郷里のお宮へ集まり、私は、総勢六人の代表となって、見送りの人々へあいさつをして、歓呼の聲に送られて駅まで行進、車中の人となつて佐世保へ向かいました。

第二海兵団へ入隊して新兵教育を受けました。軍人

生活最初の苦しい思い出は短艇漕ぎ訓練です。艇には漕手八人でオール（長さ約四・五メートル、握りの太さ約直径一三メートルくらいと思われる）を左右四人で漕ぐ。オールを持つには右手を上左手を下にして指揮者の吹く笛の合図に従って漕ぐ。

先ず第一に手に豆ができる。オールがバラバラで揃ってないと気合を入れて叩かれる。オールが揃わないといけない。それでも大分訓練を積み重ねてやっと上手になりました。

そうして入隊五カ月余りして今度は横須賀の海軍航海学校へ入校を命ぜられて横須賀へ移りました。通信教育です。今から考えてもこの教育期間が私の海軍生活では、最も苦しい訓練であったと思われまます。

通信教育の内容は、信号、手旗、モールス、電灯の点滅などです。まず、文字を覚えなければいけない。

例えば、

・―は「い」の字

・――は「ろ」の字

などです。字がわかってくると、字を記憶して綴って

文章にする。双眼鏡で相手の信号を読みとる。文章にして報告する。間違っていると上官から叩かれる。

訓練が進むと、夜間に船に乗せられて沖合に出る。

五百メートルくらい距離のある相手の船の発信（電気点滅）を受ける。波があつて双方の船ははげしくゆれることもある。風雨のこともある。雨合羽を着用することもある。いつも双眼鏡を首にかけ、腰に手旗を吊っている。実際に艦に乗り組むと定位置は艦橋で、艦長のすぐ隣に立っている。訓練では一隻の船に二〇人くらい乗せられて行く。全部で四班編成四八名であった。

教育が終わって成績の良い者は艦へ乗り組むが、悪い者は海軍の陸上勤務へ回される。私は八九点とつたので艦へ乗ることになった。商船にも成績の良い者が八人くらいいた。艦は駆逐艦が多かった。とにかく学校を卒業すると、皆ちりちりばらばらに命により任務に散って行った。同じ同年兵で同じ駆逐艦「比良」に乗り組んだのは愛媛県松山市出身の崎山サダオ（背の高いハンサムな人―安慶で負傷）と高知県幡多郡出身

の岡田と私の三人でした。

とにかく、一番つらかった通信の教育を終了して、任地発表は「上海軍需部」です。上海へ着任すると、駆逐艦「比良」の乗組みを命ぜられ、揚子江を上下して兵員物資輸送の船の護衛をすることです。時に昭和十九年四月末ごろだと思います。

「比良」に乗り組み輸送船護衛任務にあること約一年して、昭和二十年四月の中ごろのこと、安徽省安慶へ陸軍兵員輸送護衛に行ったときです。正午前かと思えます。戦傷を受けました。状況は二隻の輸送船が兵員や物資の陸揚げのため岸壁に横付けに接岸していた。護衛艦二隻は岸壁より川の中へ碇を三個下ろして（川の流れが早いので）停泊していた。そのとき、アメリカ空軍の戦闘機双胴のP 38が約八機左前方の山陰を低空飛行でバリバリと船と艦を目標指して撃ち込んできた。上空で旋回を繰り返してどんどん攻撃してくる。護衛艦も全火力を総動員して応戦反撃した。

通信の私と崎山とは艦長と共に艦橋に立っていた。地上なら防空壕へ退避可能だが艦橋は丸裸で何もない。

それでも建造物や鉄板の陰を求めて右往左往。懸命に身を隠していた。が到頭やられた。敵弾が直接鉄板に当たり、それが砕けてその破片が反射して角度をかえて跳弾となり襲ってきた。右足と右耳の頭。これらは軽傷。最もひどいのは右肩甲骨である。すべて盲貫銃創。出血がひどい。「あっ！負傷だ。出血している」と自覚したとたん、年老いた両親の顔が脳裏に浮かんだ。死ぬほどの重傷ではない。大丈夫だ。これくらいですめば幸運だと我が心に言い聞かせた。戦友の崎山は可哀想にも右手への直撃か？右手を吹き飛ばされた。無い、重傷だった。

戦闘が終わってみると負傷者は十人余り。死者はない。よかったと思う。すぐ様応急処置を受ける。軍医が「退艦して上海へ後送、陸軍病院で治療を受けよ」とのことで元氣な戦友に助けられて、何とも言えぬ妙な気持ちで退艦、後送されて上海の病院で弾の破片の摘出をする。幸にも後遺症はない。約四カ月入院、無事退院して「比良」へ復帰し、懐かしい上官や戦友のお祝いを受けて嬉しかった。

崎山戦友のことが心配で、戦後松山へ尋ねて行き飛行場の周辺の町をさがし回ったが不明で目的を達せず、空しく帰宅してそのままである。

退院、原隊復帰して再び「比良」に乗り組み、陸軍の輸送船護衛の任務についた。

昭和二十年七月ころ、今度は台湾へ行く輸送船の護衛があり上海を出港し、船団を組んで台湾を目指して進んだ。あと四時間くらいで入港の地点にきてアメリカ空軍の空襲を受けた。船団の必死の応戦防衛で事無きを得たが、命により船団は反転して上海へ帰港して一先ずホツとした。そのうちに今度は舞鶴へ行く「長光丸」に移り毛布、長靴その他の物資を運び、舞鶴港に二三日いる間に終戦となった。

命により佐世保第二海兵団に転属となり、夏の暑い最中を国鉄を利用して鈴なりにぶら下がって、どうか這々の体で佐世保へ帰ることができた。今振り返ると、何とも世の中が無秩序になり混乱を極めていた。今の平和で安全な社会状況からは想像も出来ぬ惨状でした。

佐世保に帰ってからは海外からの復員者、引揚者に毛布その他の物資の配給、引渡しを担当しておりました。十一月十五日私も復員となり、毛布二枚を貰って二年三カ月の海軍生活に別れを告げ、一路愛媛県伊予三島の自宅へ帰りました。

自宅では年老いた両親や姉たちが「今日か明日か」と首を長くして待っていておりました。無事に復員帰宅した私を囲んで家族皆で喜び、また私も裸になって背中や足の傷痕を見せて凱旋を謝したことでした。

私の出生は伊予三島の田舎で、年老いた両親の五人姉弟の末子のただ一人の男として生まれた私は女ばかりに囲まれて、やさしいムードの家庭に成長しました。農業のかたわら、母や姉は製紙や紡績に職を求めて、勤勉な家庭の中に育ちました。

私も義務教育終了後は、和紙の製紙会社（昔から私の伊予三島と隣の川之江は紙工業が盛んで現在でもそのまま、全国的な紙生産地として繁栄しています）へ就職し、朝六時から夕方六時まで毎日十二時間労働で和紙の機械すきに励みました。海軍に入る直前には、

毎月の収入が約七十円くらいあり、母や姉も働く、農業もありで一家の生活はまあまあということでした。姉たちもそれぞれ良縁を得て嫁いでおりました。

復員後の私の生活は故紙（製紙原料）の買い付けです。三番目の姉の夫が製紙会社を設立し、私に原料買い付けを任せられました。大阪、九州へ出向いて六〇キロ程度に梱包された故紙を船を雇って伊予三島へ回送する。会社の従業員ではなくて、私個人の仕事でした。業績も順調に進んで安定した生活をしました。

昭和二十六年、従姉妹の娘と結婚し、三児に恵まれています。妻は私の母の妹の娘でイトコ同志です。孫は内外合わせて七人になり最長は二十三歳、最少は中一で全員元気です。

長男は松柏農協の総務部長を勤め、毎夜帰宅は八時過ぎ。嫁は近所の幼稚園の保母で永年勤務帰宅はおそい。内孫三人は夕方になると「腹へった、腹へった」と訴える。妻の炊事当番で母親に代って食事をさせる。祖父母の任務は家の留守番、買出し、炊事、エトセトラで二人協力して元気に暮らしている。

長男夫婦は夏冬のボーナスを貰うと、二人で出し合つて祖父母に年二回のボーナスをくれる。ところがそれくらいではお正月になると、大赤字になる。毎年正月は三人の子供夫婦と七人の孫たちが我が家に集合する。食べて、飲んで、歌つて、お年玉をやる。歌が上手にできるとまたおひねりを出す。十年続いている。毎年「大赤字だ、大赤字だ」と言いながら心の中では老後を楽しんでいる。

### 轟沈空母生き残り

### 海軍生活満四年間

高根県 本田 茂

父・常助は建築業。大正十年三月三日、島根県簸川郡斐川町一、二六六で長男として生まれました。したがって家業を継ぐため大工として修業していました。

昭和十六年徴集、兵隊検査では第一乙種合格、十七年一月に現役兵として呉海軍兵学校へ入団しました。家